

# Hyperion

**読**書の秋。就寝前に宇宙を舞台にした小説を読みながら、ふと考えた。外来語の名詞の表記についてである。

架空の惑星「ハイペリオン(Hyperion)」。ギリシャ神話に出てくる太陽神(「高天を行く者」の意)の名前が由来だと思われる。私にはちんぷんかんぷんの世界だが、古典ギリシャ語では *Ἑπερίων* と書くらしい。Hyperionはその英語形だ。今回のような想像上の天体以外にも、駆逐艦や競走馬、会社などの組織、技術やシステムなど、実在するさまざまなものにも名づけられている。

ギリシャ語から英語を経由した、英語系 Hyperion のカタカナ表記は、「ハイペリオン」(「ペ」)もしくは「ハイピリオン」(「ピ」)、この2種がほとんどで、それほどバリエーションはないようだが、元祖ギリシャ語系のカタカナ表記は、実にさまざまだ。「ヒペリオン」「ヒュペリオン」「ヒューペリオン」「ヒュペーリオン」「ヒュペリーオン」「ヒュペリーオン」などなど、「ヒ」か「ヒュ」か、長音符号「ー」があるかないか、そして、その位置と数の違いの組み合わせで、多くの形の例がある。さらには、架空の宇宙戦艦「ヒューベリオン」のように、「ペ」ではなく「ベ」という変化形も。おもしろい!

たとえば、土星の第7衛星(Saturn VII)の名称 Hyperion は、「ヒペリオン」とも「ヒュペリオン」とも書かれる。『天文年鑑2022年版』(誠文堂新光社)をはじめとする各種資料を見ると、天文学の用語としては、今のところ「ヒペリオン」が優勢のようだが、このように、ひとつの名称に対して複数のカタカナ表記があるものも多い。

書簡体小説『Hyperion』も、『ヒュペリオン』『ヒュペーリオン』など、訳者や出版年代によって、邦題はいろいろだ。

「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」という川柳があるが、ギリシャ神話のこの神は、あまたある自分の名前のバリエーションを知ったら、どのような感想をもつだろうか。聞いてみたいものだ。

外国語を外来語に置き換えて、カタカナ表記にすることの難しさと、試行錯誤することのおもしろさを感じた。

そういえば、前出の『Hyperion』を書いたドイツの詩人 Friedrich Hölderlin についても、「フリードリヒ／フリードリッヒ・ヘルダーリン／ヘルダリーン／ヘルデルリーン」、これまたいくつかの書き方があるな……。夜ふかしついでにあれこれと思いめぐらす秋の夜長である。本多 葵(ほんだ あおい)